

理解と和解の間

——「親日台湾」と歴史記憶——

洪 郁 如

はじめに 台湾は「親日」か

和解とは何か。『大辞泉』では「争っていたもの、反発しあっていたものが仲直りすること」と定義されている。言い換えれば、衝突と争いがまず先にあってからこそ和解の必要が生じる。しかし、日本の植民地統治と戦争体験に関わる台湾の言説状況を「和解」の文脈から考えると、恐らく我々は多くの「不可解」に直面することになるだろう。帝国日本の侵略と支配を経験した近隣の中国や韓国は、歴史認識と戦争責任をめぐる日本との間に政治・外交の場で、あるいは民間の言論においても絶えず摩擦と衝突とを生じさせている。両者と比較した場合、台湾は常に「親日」という形容詞を冠され、あたかも「謝罪」と「和解」の課題とは遠く隔たり、甚だしく異なる存在のようである。「親日」は、そのまま日本植民統治に対する台湾の歴史評価であるかのように見なされ、各種の言論空間に氾濫している。「親日台湾」は固有名詞として、「反日韓国」「反日中国」とは対極的な存在とされている。このように単純化された図式は、今日の日本社会において、歴史問題をめぐる東アジア諸国の立場を認識する枠組みとして常用されている。甚だしきに至っては、「親日台湾」を「是」として持ち出し、「反日韓国」「反日中国」の「非」（不当性）を指摘する論調まで存在する。この類の「親日台湾」の理解は、中国と韓国では物議を醸し、批判を招く結果となっている。

過去の歴史に対する台湾人の「非批判的な語り」を如何に理解すべきであろうか。90年代以降の日本社会では以下の四つのタイプの解釈が見受けられる。第一の解釈は、「親日」を日本植民地統治の正当性の証と見なすものである。日本教育を受けた世代からの称賛が批判よりも多いことをもって、日本の台湾統治は収奪目的の欧米帝国主義と異なり、植民地に大いに恩恵を施した「良心的な統治」であったと

いう論調である。第二の解釈は、国民党統治という台湾人の戦後経験に着目するものである。1947年の二・二八事件とその後の白色テロが、国民党政権の後進性と非文明的な性格を明白にするとともに、台湾人が秩序の整然とした古き良き「日本時代」を懐かしむようになった、つまり眼前の「中国の悪」が台湾人に過去の「日本の善」を再認識させたという解釈である。このタイプの「親日」解釈は「比較」を通じての「客観性」を強く暗示している。「親日」は日本に対する肯定だけではなく、中国に対する嫌悪感の表出でもある点が強調されている。第三のタイプは、台湾人戦略論の観点からの説明である。日本時代を肯定する言説は、対内的には国民党批判の戦略につながり、対外的には日本の支持を確保し、兩岸関係が緊張した際には、中国政府をけん制する手段ともなる。第四のタイプは、ライフコースの観点から、「親日」は戦前世代が自らの青春の記憶を懐かしむ、ある種のノスタルジアの表出として眺める立場である。それは日本時代を肯定することにより、自らの半生を肯定的に位置づける行動であるとする。

第一の「植民有理」的な解釈は、台湾まで広く知られ、大きな批判に遭った。とくに、2001年に小林よしのりの『台湾論』の中国語訳が出版された後、文化界、学界、政界では大きな論争が起こった。日本のマスコミに取り上げられた「日本語人」⁽¹⁾の発言に対し、文化界や学界では、旧植民地出身者の言葉は日本国内の政治勢力に操作されやすいので、当事者の本意がどうであれ、こうした発言は慎むべきだという声があり、他方ではこの現象は台湾の歴史的主体性の脆弱さが露呈したものであるなどの指摘があった⁽²⁾。台湾島内では、『台湾論』に登場した日本語人らは「台湾独立主義と日本右翼勢力の結盟」として批判を浴びせられた。こうした言論は、当時の陳水扁政権を攻撃する材料として、政治闘争にまで発展したのである。

第二、第三のタイプの解釈は、植民地の歴史そのものに対する関心というよりも、90年代以降の日本社会における対中意識に左右された部分が大いである。そのためここでは詳論しない。第四の言説は、プラス評価の「日本」を、日本を語るものではなく、台湾人が自己＝台湾を語るための道具とみなすものである。こうした語りについて、人類学者の上水流氏は「〈自画像〉の形成」に状況依存的に選択されたものであり、ここでの「日本」を過大評価することはできない、と指摘している⁽³⁾。

本論文では、「和解」に至る長い道のりの第一歩である「理解」に重点を置き、近現代台湾社会研究の視角から「非批判的な語り」に表れた台湾の「親日」イメージについて考察を加えてみたい。

一. 「日本語人」と日本語テキストの特徴

最初に、問題の整理を試みてみたいと思う。

第一に指摘できるのは、「日本語人」による日本語テキストの特殊性と限界性である。台湾社会が日本植民時期の歴史を如何に評価してきたかについて、日本では「日本語人」のインタビュー、回想録、自伝などの形式を含む日本語テキストに手掛かりを求めることが多い⁽⁴⁾。しかしながら、植民支配の終焉後、数十年の歳月を経た今日、なおも日本語で発話しようとする行為自体が、強い意志に裏付けられているというべきである。まず、言語面から見ると、植民地学校教育を受け、日本語文は彼ら／彼女らの思考と表現のための主要言語となっていることが明らかである。次に、日本語で話すという選択には、日本社会に対する言語の発信力が意識されていることである。日本語は今日の台湾では外国語であり、日本語で訴える対象は当然、本国社会ではなく日本社会である。日本の出版社によって出版されたものや、日本人学者によって行われた聞き取り調査においては、こうした発話者の意識はさらに明白であろう。この言語・発話的特殊性を考えると、語る相手として台湾社会を想定しない「日本語人」の発言やテキストが、再び翻訳の形で台湾国内に逆輸入された結果、そこで強烈な社会的反応が引き起こされたのも当然であろう。

第二に、一般的な認識において、台湾の戦前世代と「日本語人」は常に等号で結ばれてきたことである。日本語文と無縁な「非日本語人」が戦前の台湾社会ではむしろ大多数を占めたにもかかわらずである。かつて筆者は、「日本語人」と「非日本語人」の間の階層的断絶の問題を指摘したことがある⁽⁵⁾。つまり、日本の世界の浸透度には、日本語人と非日本語人の区分けに見られる階層的な区別が大きく関わっていたということだ。日本植民統治下の台湾では、エリート層と民衆層の経済的分化と同時に階層間の文化的な分化も進行していた。地主層を温存した植民地経済構造は、台湾の社会的格差を拡大し、教育機会の有無は異なる集団について歴史的経験と歴史認識上の差異をもたらした。「日本教育」の多寡が階層標記の機能を有し、そして「日本語」使用は識別の身体的記号ないし表現となっていた。植民地台湾の「非日本語人」に対する戦後日本人の意識は希薄である。60年代でも台北を訪れた日本人は、「街に出て買い物をする時などは中年の人に話しかければたいいてい通じる。話しかけて日本語が通じなければ三十歳以下か外省人と思えばよい」という認識であった⁽⁶⁾。日本人の一般的な台湾認識では、「日本時代」に対する台湾

人の歴史評価も、「親日」でない言論の持ち主は、「外省人」⁽⁷⁾、「若い人」だといい、「日本語」による区分けに類似した認識構図を示している。これはつまり、台湾の「親日」イメージが、日本語文のテキストに過度に依存していた結果でもあった。

第三に、「良いところと悪いところ」論が「日本時代」評価の典型である。「良いところ」の評価には、二つの事象がつねに挙げられている。一つは衛生、交通、産業、教育などいわゆる「近代化」の指標となるインフラ整備であり、もう一つは個人の経験世界のなかの「良い日本人」の存在であり、具体的には植民地の民族差別を超えた日本人の親友、恩師への深い思いであった。

興味深いのは、「親日」と見なされる日本語人の著作のなかでは、例外なく「悪いところ」にも言及されていたことである。日本の読者への配慮や日本側の出版社の意思⁽⁸⁾に左右された結果、「良いところ」に比べれば、書籍の中に「悪いところ」に関する記述が占める比重は極めて少ない。ともあれ「悪いところ」は、「差別」の問題に集約される。「近代化」賞賛は戦後台湾の政治力学の影響を大きく受けているのに対し、「差別」批判は、当時の青少年の心に残された生々しい記憶と傷跡そのものであった。「親日」の代表格と見なされるベストセラー『台湾人と日本精神』⁽⁹⁾も例外ではなかった。

日本語テキストの「差別」に関する語りは、たいてい二つの内容を含んでいる。(1) 制度的次元において、進学、定員枠における日本人優遇と台湾人差別などを含む植民統治下の教育システムの不平等、(2) 経験的次元において、学校現場における日本人教師や学生から受けた差別である。この種類の語りからみれば、差別体験者の当時の対応は、これを運命として忍受するか、もしくは消極的な抵抗に止まることがほとんどであった。言い換えれば、回想のなかの青年たちの多くは「体制内の抵抗」(当然、積極的な抵抗や植民体制の外側に出口を求める者もいたが、こうした歴史を記述した、日本で出版された日本語テキストは多くない)に終始したのであった。

個人の植民地差別体験において、心の癒しになるのが、さきほど「良いところ」の二番目に挙げられた、平等に接してくれた日本人親友、恩師の存在であった。しかしここでは、植民地支配関係において、日本人の「友情」「温情」に救いを求めることに内包される不信感にむしろ注目したい。台湾最初の女性記者、楊千鶴が1942年に発表したチャイナドレス着用の心境を綴った文章は、この問題を婉曲な表現で提起している。内地人の友人は自分のチャイナドレス姿を常に褒めてくれたが、これと対極的な存在は、冷たい視線と言葉で責めてきた通りすがりの日本人女

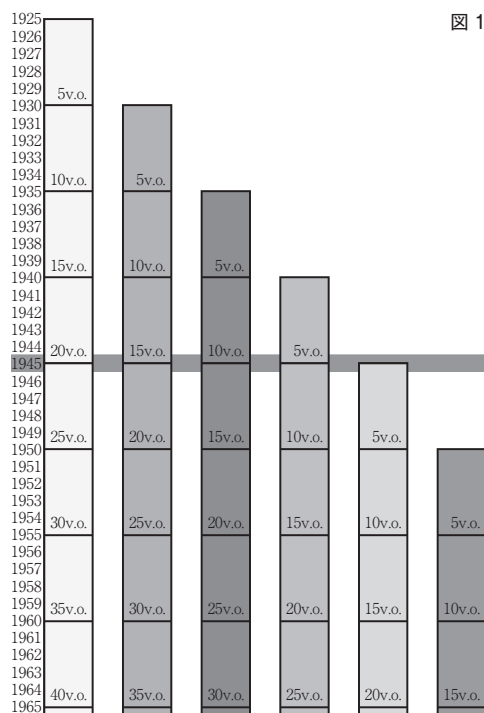
性であった。彼女たちは「内地人女性」という属性を共有していたが、「友人」であるか否かで、チャイナドレスの自分に対する態度が異なってくる。個人的なつながりが抜きとられた場合、単なる「内地人」と「台湾人」といった支配と被支配の権力関係だけが残る。攻撃から身を護るための貴重な砦も、万能ではないことに彼女は気付いたのである⁽¹⁰⁾。

構造的差別の下にあっても、善意の「良い日本人」との親密な付き合いが戦後にいたるまで懐古されているのである。さらに、「良いところと悪いところ」の語りがほとんど学校空間での経験に限定されていたことも一つの重要な特徴であった。

二. 戦前世代の記憶と差異

本論文の後半では、世代間の「日本時代」をめぐる歴史記憶の差異について整理してみたい。

まず、「戦前世代」は、学校教育の段階では帝国中心の歴史叙述の洗礼を受けたが、その年齢と教育年数により、記憶の濃淡は一樣ではなかった。【図1】は青少年期が1945年を跨ぐ複数の世代を示している。ここから分かるように、教育現場で与えられた皇国臣民としての「日本人」アイデンティティの濃度は、「戦前世代」の間でも差異が存在している。1930年以前生まれの知識人は、おおよそ1945年以前に中学校、女学校の全課程を修了した世代となる。1930年以降に生まれた世代は、5年程度の差とはいえ、中等教育または初等教育の途中で日本植民統治の終焉を迎えた「皇民化教育」下の「少国民」に属する人々であった。1925年生まれ世代は、終戦時は20歳、1930年生まれ世代は15歳、1935年生まれは10歳であった⁽¹¹⁾。



日本統治期台湾における公学校教育の内容的特徴は、歴史教育に即して言えば、日本史を植民地自身の歴史として叙述し、台湾人児童に「日本」を「わが国」として植え付けようとするものであった。教科書の中の台湾は歴史が欠如した、空間のみの台湾であり、つまり「過去のない郷土」であったという⁽¹²⁾。同世代における日本教育に含まれていた歴史記述の影響範囲について、年齢層と人口規模から把握してみたい。まず、年齢を縦軸に下限を描き出したい。筆者の聞き取り経験によれば、日本教育の記憶と当時の出来事を確実に語ることはできたのは、すくなくとも1945年時点において初等教育の高学年か中等教育に在籍中であった世代の人々である。この経験を考慮し、1935年頃に生まれ、1941年に国民学校に入学し、四年（約10歳）時に日本教育の終末を迎えた世代を、日本教育の影響を受けた年齢的な下限としたい⁽¹³⁾。次に、横軸での同世代の「日本教育」経験の共有状況について、戦前の台湾人児童の就学率を参照する必要がある。1941年における台湾人学齢児童の就学率は61.6%であり、男女別ではそれぞれ73.6%、48.7%であった⁽¹⁴⁾。つまり男子は約7割、女子は約5割がこうした歴史教育の経験者であった。

戴国輝は呉濁流の小説『亜細亜の孤児』の解説の中で、「われわれ」の間に意識的ないし無意識的に日本語を使用するのが、「われわれ」の世代の特徴であると述べている。「われわれのほとんどが、九・一八（満州事変）の前後に生まれ、植民地解放運動の洗礼を受けることがなかったばかりか、植民地の奴隷教育、強化された皇民化運動、さらには煽る一方の軍国主義教育、いわばこの三重の重いローラーの下で先輩以上に母語の福佬話、客家話それに高山族の各方言までがまさに奪われ尽くされかかった世代に属する。われわれの世代は、「植民地の傷痕」と国語の習得未熟（習得開始年齢が大き過ぎたこともあるが、二・二八事件やそれ以降の当局の失政もあって外省人への単純な反発も深層心理に他方ではあったことが特に僕らの世代の国語習得を遅々と進ませなかった）とが重なりあわさって、台湾式日本語しかお互いの共通語に持ちうることはできなかったのだ」⁽¹⁵⁾。

「戦前世代」が青少年期を過ごした「日本時代」に対する評価には、植民地統治そのものと自らの人生の両方が内包されているが、世代間の縦軸、あるいは、同一世代の横軸においても相当な差異が存在したことに留意したい。言語を例にすると、多くの日本教育世代の戦後の日常生活において、日本語は母語と並ぶ日常言語のひとつとして定着していた。しかし1930年生まれの林莊生は、戦後に入ってから無意識に日本語を使用したことで先輩世代の蔡培火によって叱責を受けてから、この「慣性」を自戒した経験について述べている。「彼に非難された経験のなかで、この

ことは最も印象深かった。留学前のある時、彼に電話し、何も考えずに〈もしもし〉と言った。これを聞いた彼は〈いまはいつの時代か。まだもしもしなどと言うのか〉と直ちに反応した。〈もしもし〉は電話の会話の切り出しに使う日本語であり、中国語の〈WEI〉に相当する。当時台湾人の電話での会話には依然として常用されていた。しかし台湾人が日本語で話すことについて、大先輩はアレルギー反応を起こした。その後、彼に電話する前には必ず〈WEI, WEI〉と一、二回の咳払いをしてからダイヤルを回すようになった。無意識に〈もしもし〉と口を滑らせ、この抗日の元勳を刺激する事態を防ぐためであった」⁽¹⁶⁾。

林莊生のこの著作は中国語で書かれていることに注目したい。1943年に台中第一中学校に入学した林が中国語を習い始めたのは、三年生の時に戦争が終わってからであった。だが、文壇、学界に身を置く者を除き、林と同じ1930年生まれの台湾人世代が中国語で過去の記憶を綴ることはむしろ例外的であった。

学校教育に即して言えば、戦後教育も「戦前世代」の歴史の記憶に影響を与えたもう一つの要因であった。高校、大学への進学、アメリカ、日本など海外への留学を経験した知識人集団にとって、時代と政権の移り変わりにともない公式的な歴史観が更新されるたび、個人の歴史的記憶と評価も再調整を余儀なくされた。戦前・戦後に跨って学生時代を過ごした世代は、これまでの歴史叙述を相対化する機会も得た。自らの努力により日本語以外の中国語、英語、母語などの言語手段を獲得した。その後の個々人の人生の経歴により自己表現のための言語の選択も異なってくるが、ここには戦前の日本語世代が「脱植民」を達成し、「植民地の傷痕」を克服しようとする努力が示されている。

1932年生まれで、終戦時に台南二中の一年生であった数学研究者の韓良信氏は、次のように述べている。「私の世代の台湾人は台湾語、北京語、日本語、英語、共にある程度出来ますが、すべて生半可です。もうアメリカに半世紀も住んでいます。が、恥ずかしいことに、英語では、アクセントや文法上の間違いから抜け出せません。日本語はご存知のように小学生程度、北京語も大差はありません。台湾語では、よく母から発音を矯正されていました。……吾々にとって、此れは〈悲しい〉のか〈得した〉のか解りかねます。確かに、英語や日本語で専門書、論文、小説などが読めるのは、得だと思います。しかし、いざ発表となると、何語で書けば、知識人らしい文章を書けるのか、甚だ心細い次第です」⁽¹⁷⁾。戦後の半世紀以上の歳月にわたり、「植民地の傷痕」を主体的に乗り越えようとしてきた台湾人の複雑な心情を、言語の問題からも読み取ることができる。

三. 国民党統治下の世代と記憶

戦後の台湾では、義務教育が本格的に実施され、学校教育の射程が大幅に拡大した。日本統治期、国家主導の歴史叙述の影響範囲は学校教育を受けた一部の台湾人学生に限られていた。戦後、国民教育の普及により、就学児童数は1945年の85万人から、1967年には234万8,000人に急増し、22年間で三倍近くの増大であった。就学率から見れば、1945年の80%から1967年には97.16%まで上昇した⁽¹⁸⁾。「国仇家恨（国家を侵略され家庭を壊された恨み）」の中国における抗日の集団記憶が義務教育を通して広まった。1945年以前から台湾在住のいわゆる「本省人」に向けて、国家の公式的歴史叙述モデルは戦前日本教育の経験を持たない民衆層にまで浸透していった。

戦後の国民党教育の歴史記述の特徴をみてみよう。国民党の台湾転移後、大陸反攻は最高の国家使命となり、台湾社会における新たな国民統合が展開された。「learning to be Chinese」が歴史記述の主軸となり、正統的な中国史が教え込まれた。それは、周、春秋戦国、秦、漢以来の五千年の悠久な「中原」の歴史であり、とりわけ注目されるのは、共産党の中華人民共和国史に対し、1911年から中華民国が代表してきた「正統中国」に重点を置くことである。こうした歴史記述のなかに「日本」は日清戦争以来の「国難」をもたらした最大の「侵略者」として位置付けられている。近代史の記憶は、蔣介石の「東征（陳炯明討伐と広東防衛）、北伐（北洋軍閥に対する制圧戦）、剿匪（共産軍殲滅作戦）、抗日（日中戦争）」の国民党史に取って代わられる。歴史記述の中の「日本」は、侵略と虐殺をもたらした8年間にわたる抗日戦争の敵であった。

他方、戦前の台湾人世代の植民地の記憶がここでは継承されなかったことにも注目したい。中華ナショナリズム中心の教育のもとで、「本省人」家庭の戦後世代は、外省人の同級生と席を並べることで中国大陆の抗日の歴史記憶を内面化し始めた。日本統治時期の台湾史について唯一取り上げられたのは、中華ナショナリズムの枠組みで定義された前期武装抗日運動と1930年の霧社事件であった。「本省、外省を問わず、彼らは自分が成長してきた台湾という土地の過去に非常に疎い。あるいは中国の歴史についても同様に、彼らは国民党の定まった言い分に依存して台湾の歴史を理解するしかなかった」と社会学者の蕭阿勤は指摘している。また、台湾抗日政治社会運動に深く関わったメンバーの子女であるにもかかわらず、台湾の歴史に

についての知識も興味もなかった台湾人青年の事例を取り上げ、外省出身者はなおさらであったと示唆している⁽¹⁹⁾。

日本で知られている呉念真の自伝映画『多桑』は、家庭内における戦前日本世代と戦後世代のイデオロギーの衝突を描いている。いつも「昭和4年生まれ」と自称する1929年生まれの父は、小学校の娘に国旗を描く宿題を手伝った際に、中華民國の「青天白日滿地紅」の左上の白い太陽を赤く塗りつぶした。娘が兄に訴えると、父は台湾語で「白い太陽があるかい」「日本の国旗を見てみる、何色か。」と怒り出すと、娘は中国語で「何でも日本、日本。汪精衛か。」「売国奴だ！汪精衛だ！」と言り返した。中国語が解らない父は息子に「彼女は何を言ってる？」と聞くが、息子は「別に」とやり過ごし、父娘の激突を終息させたのである。

中華ナショナリズム史観の移植と台湾歴史叙述の断絶は、確かに、戦前と戦後の台湾人の歴史記憶に世代間の断層を作り出した。他方で、中華民國国民として新たに編入され、学校教育の対象とされた「非日本語人」家庭出身の戦後世代がその植民地と脱植民地的な歴史記憶の再構築をどのように経験したのかという問題については、まだまだ検証していく余地がある。

四. 民主化後の世代と記憶

第三の時期は、1987年に戒厳令が解除されてから2000年の第一次政権交代までである。この時期、台湾人の主体性の確立過程にあって、台湾史の語りが新たな意義を付与されるとともに、「日本時代」の歴史的記憶の位置も更新されることになった。1980年代後期から90年代の全期にわたって、国民党の台湾移転前に既に蓄積されていた日本時代のインフラと教育資源を強調する「近代化」叙述が、国民党の排他的な中華ナショナリズムの歴史叙述に対抗する言説として現れた。台湾人の尊厳と自信の回復を試みた政治社会運動のなかで、「日本統治期台湾史」は一つの「資産」と見なされ、この歴史的経験を自らと中国文化とを差別化する、「台湾文化の独自性」の重要な構成要素と見なされた⁽²⁰⁾。「日本時代」の台湾史の強調と再構築が「われわれ」意識の醸成について大きな役割を果たしたことは明白であろう。しかし中華ナショナリズムの歴史叙述に対抗し、従来の「日本性」「奴隷性」の汚名を返上し、名誉回復に努めるあまりに、植民統治期の「近代化」について過度の美化を行い、過大評価を生んだ部分については、社会内部からの批判を受けた。注意を払いたいのは、「植民地近代化」ないし「日本時代」の歴史経験をめぐっての

台湾社会内部の論争に対する日本のマスコミの認識である。「本省人」対「外省人」、「独立」対「統一」、「親日」対「反日」といった単純化された二項対立の図式で理解するのでは、多元的なイデオロギーが共存していた90年代以降の台湾社会を見誤る危険性が高い。

世代の観点から見ると、戦後国民党の学校教育を受けた最初の世代には、民主化過程において、これまで受けた教育の歴史イデオロギーを相対化し、徐々に歴史認識の軌道修正を行った事例が多く見受けられる。学校教育からの公式イデオロギーの影響力に限って言えば、李登輝が司馬遼太郎に語った「私は22歳まで日本人だったのですよ」⁽²¹⁾と同じ意味合いで、「私は××歳まで中国人だったのです」と言える世代でもあったろう。

「日本」は言うまでもなく「中国」「アメリカ」と同様に、台湾の歴史に内在する重要な外部要素である。「日本時代」の歴史記憶の構築にあたり、1987年の解嚴後に青年期を過ぎた世代の台湾人は、世代間の断絶の問題に直面した。映画『多桑』を例にすると、国語（中国語）番組ばかりのテレビの前に座る孫世代にあたろう。母語（閩南語、客家語、原住民各部族の言語）には疎く、国語（中国語）を唯一の使用言語とする世代は、「爺さん／婆さん」とは共通言語を持たない。祖父との距離は戦後世代の父よりさらに遠くなる。言語だけの問題ではなく、戦前世代の植民地の記憶を次の世代に継承することにはさらに大きな困難が立ちふさがっている。世代の断絶は家庭空間に限らない。一部の「日本語人」からすれば、孫世代の台湾人よりも日本時代について聞き取りに訪れてきた「日本人」のほうが親しく感じられるようである⁽²²⁾。日本語を共通言語として用いることができ、マイナスイメージの戦後中国教育にも無縁な日本人に「日本時代」を語ることは、台湾人の孫世代との心理的隔たりとは対照的に、親密さを感じるひとときなのである。

戦後、半世紀以上を経た今日でもなお存在する世代間の隔たりは、戦前の植民地支配と戦後の国共対峙、冷戦体制に根源をもつが、この断絶を縫い合わせるためには、戦前世代台湾人の「日本時代」の記憶、すなわち植民地支配下の台湾史記述を再構築する、という未完の課題に引き続き取り組んでいくしかない。

おわりに

複数の世代間に走る記憶の断層は、台湾における51年間の日本植民統治、そして百年来の政治変動の歴史的産物であった。日本の植民地支配に対する台湾社会の

歴史評価は難解で幾重にも枝分かれしており、単純な植民地批判には収斂していかない。だからといってこのような「非批判的な語り」を安易に「親日」に結び付けて語ることは避けるべきだろう。「われわれの過去」を明快に語れない苦境自体が、数世代にわたり刻印された植民地主義の傷跡でもあり、和解はこうした他者の歴史の理解を通じて初めて可能となるであろう。

歴史記憶と記述がしばしば「政治化」された結果、21世紀の台湾社会は「汎政治化」の現状について疲労困憊しているように見える。中華民国と台湾の「和解」の努力はなおも続けられており、植民地の歴史的記憶を主体的に捉え直す作業、世代間、エスニックグループ間の相互理解をはじめ、日台間、台、韓、中、日を含む相互理解と対話のための基礎作業は、いま、ようやく始まったばかりである。

[付記] 本論文は学習院女子大学のワークショップ「戦争、植民地、和解——東アジア現代史再考」(2013年7月29日)における筆者の報告「理解と和解の間：台湾史研究の視点から」を基に修正を加えたものである。報告時に貴重なコメントを賜った金野純、劉傑、武田彩花、楊大慶、宋圭振の諸先生に深く感謝したい。なお、本稿は、2011-2013年度日本学術振興会科学研究費(基盤研究(C))「台湾家族における文化資本の継承と変容：戦前・戦後を跨ぐオーラル・ヒストリーの構築」(研究代表者：洪郁如、研究課題番号：23510308)による研究成果の一部である。

注

1. 台湾の「日本語人」とは、戦前の日本教育を受けた世代を指している。日本語を媒介に精神生活を形作ったことがその特徴とされる。若林正文『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人——台湾人の夢と現実』朝日新聞社、1997年。
2. 代表的な論説として、陳光興、李朝津編『反思〈台湾論〉：台日批判圏の内部対話』(台湾社会研究季刊研究社出版、2005年)を参照。
3. 上水流久彦「自画像形成の道具としての『日本語』」五十嵐眞子、三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用』風響社、2006年、187-216頁。
4. 「日本語人」による日本語著作は、黄智慧が一覧表の形で整理している。黄智慧「台湾における〈日本文化論〉に見られる対日観」『アジア・アフリカ言語文化研究』(71)、2006年、161-165頁を参照。
5. 洪郁如『近代台湾女性史——日本の植民統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2001年、372-374頁。
6. 芳野菊子「台湾の言語生活」『言語生活』165号、1965年、73頁。
7. 「外省人」とは、自分が所属する省(中華民国の地方行政区画の最上位)以外の省の出

身者を意味するが、台湾史の文脈では1945年以降に、中国から台湾に移住した者とその子孫を指す。他方、日本統治時期からの在住者とその子孫は「本省人」と呼ばれる。

8. 柯徳三はチャンネル桜のインタビュー（2009年4月21日）の中で、日本で出版された本『母国は日本、祖国は台湾——或る日本語族台湾人の告白』（桜の花出版、2005年）に書かれた「悪いところ」が、出版社の意向により大幅に削除されたと述べている。「私の出版した本はね、いいことわるいことたくさんあってね、あの時は私がしゃべった悪い事、今まで日本がこうした、こうした差別待遇とかたくさん書いたけど、本の中では全部削られた」。これに対し、出版社側は著者の了解を得たうえだとして反論した。
9. 蔡焜燦の著書では、制度的な差別について、1939年に入学した彰化商業学校の内地人枠を取り上げ、「私が入学した当時は百人の定員に対し千八百人が応募し、その競争率は18倍の狭き門だった。だが一年後には22倍とさらに狭くなっていた。ところが、定員の15パーセントが内地人枠として確保されており、そうした内地人優遇制度に差別があった」と回想している。個人の経験的次元について「内地人枠で入学してくる者の中にはデキの悪い生徒もあり、我々は当時そういう連中を“ボンクラ”と呼んでいたものだ。そんな“ボンクラ”から我々台湾人が“チャンコロ”とばかにされ、こうしたことがもとで殴り合いの喧嘩がはじまったこともある」が、こうした差別体験は戦後の交流の中で克服されていったという見解を示した（蔡焜燦『台湾人と日本精神（リッペンチェンシン）——日本人よ胸を張りなさい』日本教文社、2000年、82-83頁）。日本人引揚者と旧植民地出身者の人的ネットワークの「戦後」について、不明な点は多く、さらなる研究の余地がある。
10. 洪郁如「植民地台湾におけるファッションと権力」『接続』4、ひつじ書房、2004年、18頁。楊千鶴の文章は、次のように締め括られている。「私は友情にいつも感謝してゐる。友情は民族間の摩擦を緩和し、私を民族の卑下から引き上げてくれる。すぐ前にならんでゐるお友達の横顔を見ながら、この人が私の未知の人だつたら、やはり先刻のやうな言葉を私に浴せるだらうと考へた」。楊氏千鶴「長衫」『民俗台湾』第2巻第4号、1942年、26頁。
11. ちなみに、NHKのJAPANデビューに登場した柯徳三は1922年生まれ、前台湾総統李登輝は1923年生まれ、蔡焜燦は1927年生まれであり、台湾人学者について王育徳は1924年生まれ、戴国輝と劉進慶は1931年生まれ、許介麟は1935年生まれ、涂照彦は1936年生まれであった。また「さよなら再見」の著者黄春明は1935年生まれであった。
12. 周婉窋「植民地主義の後遺症——台湾を中心に」『立命館言語文化研究』20巻3号、2009年、136頁。周婉窋『増補版 図説台湾の歴史』平凡社、2013年、141頁。
13. 小・公学校の入学年齢は満六歳と規定されていた。実際には、経済的要因、両親の考え方、健康状態など様々な原因で、入学を数年遅らせる事例は珍しくはなかった。
14. 台湾省行政長官公署統計室編『台湾省五十一年来統計提要』台湾省行政長官公署統計室、1946年、1241頁。
15. 戴国輝「解説 植民地体制と『知識人』——呉濁流の世界」『亜細亜の孤児——日本統治下の台湾』新人物往来社、1973年、310-311頁。
16. 林莊生『懷樹又懷人：我的父親莊垂勝，他的朋友及那個時代』自立晚報、1992年、280頁。

17. 韓良信氏から筆者あての電子メール（2013年2月16日）。氏は日本統治期に台湾政治社会運動で活躍した韓石泉医師の次男である。
18. 王家通「台湾の人口問題と義務教育」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』（9），1969年，67頁。
19. 蕭阿勤『回帰現実：台湾 1970 年代的戦後世代與文化政治変遷』台北，中央研究院社会学研究所，2008年，84-85頁。
20. 蕭阿勤，147頁。
21. 司馬遼太郎『台湾紀行』朝日新聞社，1994年，104頁。
22. 黄紹恆も，一部の「日本語人」が同じ台湾人の自分に対し過去の歴史記憶を語りたがらないという現象について触れ，同席の日本人学者のお蔭で多くのお話を拝聴できたと皮肉っている。以下の論文を参照。黄紹恆「日本左翼，右翼言論光譜裡的台湾図像」陳光興，李朝津編『反思〈台湾論〉：台日批判圈的内部對話』台湾社会研究季刊研究社出版，2005年，16頁。